
遊戯王 ～とある高校生の日常的で非日常的な生活～

露

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

遊戯王 ～とある高校生の日常的で非日常的な生活～

【Nコード】

N7862Z

【作者名】

露

【あらすじ】

冬休み最終日、その高校生は母親に買い物を頼まれた。その帰り道、彼は謎の男と出会い、デュエルすることになる。そしてそのときから、彼の日常は大きく変わろうとしていた……。

遊戯王を織り交ぜた学園物だと思ってくれれば幸いです。

プロローグ　　始まりはいつも唐突に……（前書き）

初めまして。今日からこちらでも小説を書くことにしました。時期が時期なので結構不安だったりしますが……。後、不安だといえ赤ちゃんとは完結出来るかどうか、ですね。

まず、この話を読むに当たって注意事項を。

- ・この話はアニメの再編物語ではありません。
 - ・主人公の使用デッキは不特定です。
 - ・基本、チートドローだったりじゃなかったりとか。
 - ・この話のデュエルディスクは基本的にはアニメ、遊戯王ZEXAの遊馬が使っているようなものです。
 - ・更新は不特定です。
 - ・一話一話が基本短いです。
 - ・自作オリカなんてありません。
- 以上、ですかね。

では、どうぞ。

プロローグ　　始まりはいつも唐突に……

それは、突然のことだった……。

「私と、デュエルして下さい……」

そいつとあったのはホント余りにも突然のことだった。

「お前は誰だ？　俺は訳の分からん奴とデュエルするつもりはない」
確か俺は母さんに買い物を頼まれて……、今はその帰りの途中のはずだ。それに昼間だから辺りはまだ明るい。

「フフッ、貴方はまだ自分のおかれた状況が分かってないようですねえ」

は？　どういうことだ？

「辺りを見てみたらどうです？」

謎の男が何言ってるのか俺にはよく分からんが、辺りを見てみると、明るかった空が黒い。というか、何かに包まれてる感じがだ。

「漸く目が馴れてきたようですねえ」

今まであいつのことしか見てなかったから気づかなかったのか……。

「これは……、お前がやったのか？」

「そうとも言えますし、そうじゃないとも言えます」

「意味不明……」

「因みに、素直にデュエルしてくれば何も起きやしません」

「……受けないとしたら？」

「さあ？ そのときは私にも分かりません」

逃げ道なし、か。

「いいだろう、お望み通りデュエルしてやる」

「フフツ、私にとっては嬉しい限りです」

全く、敬語が不気味な野郎だぜ……。

そして、この掛け声で俺達のデュエルが始まった。

「デュエル！」

そして、数ターンと30分が経過した頃……。

「リビングデッドの呼び声を発動、墓地のスクラップ・ドラゴンを蘇生。カードを一枚を伏せ、スクラップ・ドラゴンの効果発動、今伏せたカードとお前の伏せカードを破壊。そしてお前にダイレクトアタックして終わりだ！」

よし、勝った！ これで解放される。

「クツクツク……」

「何だ、何がおかしい？ 俺はデュエルに勝ったんだ。早く解放しろ」

「おや、これは失敬。やはり貴方がスクラップ・ドラゴンの使い手でしたか……」

やはり？ どういうことだ？ それに、スクラップ・ドラゴンはレア度の高いカードだが、使っている人は結構いるぞ？

「おい、どういうことだ？ ちゃんと説明しろ！」

「時期に分かることです。然し、ここでの事は忘れてもらったほうが今後の都合にとってもいいことでしょう」

膝をついていた男が立ち上がって両手を広げる。

「何をする気だ！？」

「また会うことを楽しみにしてますよ」

俺の意識が朦朧としていく中、あいつはそう言って消えていった。クソ、まだ聞きたいことがあるのに体が動こうとしねえ。

そして俺は、完全に意識を手放してしまった……。

ブログ 〽始まりはいつも唐突に……〽（後書き）

次は近いうちに投稿したいと思います。

では、感想やアドバイスをよろしくお願いします。

TURN 1 〳 全ての始まりは日常から〳 (前書き)

少し早めに投稿できました。

それでは第1話、どうぞ！

TURN 1 〽全ての始まりは日常から〽

目を覚ますとそこは見慣れている白い天井、俺の部屋だった。眠っていたのか、俺は……。

「やっと起きたんだ」

頭を覚醒させると聞き慣れた女性の声がした。体を起こし、その声の主のほうを見る。そこにはセミロングの茶髪の俺の妹、北条真波^{ほつじょう まなみ}が椅子に座って心配そうな表情で俺を見ていた。

「おはよう、龍一」

「おはようって……、今何時だよ」

俺の名前は北条龍一^{ほつじょう りゅういち}。近くの私立高校に通っている一年生だ。

それよりも、外は暗いのおはようって……、何の冗談だよ。

「7時半だよ」

「7時半って……、もう夜中じゃねえか」

というか、いつから俺は寝てたんだ？ 確か、母さんに買い物を頼まれて、それで……。

「そんなことより龍一が道端で倒れている、て聞いたときは私もお母さんも吃驚したよ!」

「え、倒れていた？ 俺が？」

はて、そんなことあったっけな……？

「買い物から終わった後に倒れてたんだよ？ 幸い、何も取られてなかったからよかったものの……。私達、本気で心配したんだよ！」

「そうか……。悪かったな……」

磨波はそれ以上何も言わない。その顔を見てるだけで俺を心配してくれてるのはよく分かる。

「……もうすぐご飯だから、早く支度しなさいよ？」

彼女はそれだけ言っただけで俺の部屋からでていった。

しかし、色々疑問がある。まず、買い物に行ったこと、これは覚えている。問題はその後だ。買い物したデパートからここまではそんなに離れていない。だが、帰り道のことを覚えていない。俺は襲われたのか？ それにしちゃ何も取られてないのは不自然だし、第一痛みを感じない。疲労で倒れたにしちゃ寝てた時間が短いし……。

「……わかんねえもんは分かんねえか」

俺はそう納得させて部屋を出て一階に降りた。

* * *

俺は今食事しているのだが、どうもさっきから考え事にばかり頭が

行つて箸が進んでない。

「龍一、大丈夫？」

そう声をかけるのは俺の母、北条真由美だ。ほつじょう まゆみ俺の通つてる高校の教師をしている。

「大丈夫だよ。ちょっと考え事してただけだ」

「本当に？ きょうも道端で倒れたんだから早めに寝るのよ？ 明日からは学校でしょ？」

「わあつてるよ」

つたく、心配してくれんのはいいけど過保護なんだよな、俺の母さんは。

「大丈夫だよ、お母さん。龍一は平気だつて。それよりもアトピーでデュエルしょー！」

「はいはい」

真波は元気だよな、ホント。

その後、夕飯が終わって片付けをした後、俺達は庭に出てきた。全く、冬の夜はホント冷え込むな……。

そして、デュエルディスクを腕に装着すると俺達は構えた。

「じゃあいくよ、龍一！」

「ああ！」

「デュエル！」

TURN 1 〽全ての始まりは日常から〽 (後書き)

次回からデュエルが出来そうです。

では、感想やアドバイスをお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7862z/>

遊戯王 ～とある高校生の日常的で非日常的な生活～

2011年12月25日19時49分発行